



情報工学部情報基盤室の立ち上げと活動内容

大橋 健¹
井上 勝裕²
松元 隆二³

1 はじめに

昭和60年5月に設置された情報工学部創設準備委員会において「九州工業大学情報工学部キャンパスオートメーション構想(案)」がまとめられ、情報工学部はその設立された当初より情報科学センターと共にキャンパス内の情報化に積極的に取り組んでいます。情報工学部ができた頃と言えば、現在では当たり前のWebはおろか電子メールもまだ一般には普及していませんでした。パソコン用日本語ワープロソフトがやっと実用的になりつつある頃のことです。キャンパスオートメーションへの取り組みや当時の状況は情報工学部10周年記念誌(CD-ROM)[1]や情報科学センター広報誌に掲載されていますのでぜひ一度ご覧になってください。

このように、情報工学部という名前に相応しいキャンパスの情報化を推進していこうという方針が立てられ、情報基盤室の活動はその延長上にあるといえるでしょう。この記事では、情報基盤室設立の経緯と現在の活動状況について、情報科学センター広報誌の紙面をお借りしてご紹介するものです。

2 情報基盤室の立ち上げ

まず、情報基盤室が作られた背景と現在の体制についてご紹介致します。

2.1 情報基盤室設置以前の体制

情報工学部の情報化に取り組むために、情報科学委員会とその下に情報化専門委員会、情報化作業委員会、事務情報化推進室が設置されました。情報化専門委員会は、各種委員会との連携で運営されるものであり、学部の業務運営については、それぞれの担当委員会あるいは事務局が責任を持つべきであると役割が定められました。

情報化専門委員会において、情報に関連するプロジェクトが議論され、情報化作業委員会や事務情報化推進室及びプロジェクト毎に組織された作業委員会において様々な機器やソフトウェアが開発され導

¹情報基盤室長，生命情報工学科，ohashi@bio.kyutech.ac.jp

²前情報基盤室長，システム創成情報工学科，inoue@ces.kyutech.ac.jp

³前情報基盤室員，知能情報工学科，matumoto@ai.kyutech.ac.jp

入されてきました。この構成は、学部委員会の再編成により情報科学委員会と図書委員会が合併して情報化推進委員会が誕生しても引き継がれ、ネットワーク・計算機管理作業委員会、ICカード作業委員会、VR作業委員会、教務情報作業委員会、文書電子化作業委員会といった作業委員会が設置されました。これらの作業委員会は、情報化推進委員を含めた教育職員、技術職員、事務職員から構成され、それぞれ担当する案件の管理運営を行っています。

2.2 情報基盤室の成り立ち

ご存知のように情報システムの発展は目覚しく、新しい装置やサービスが次々と現れています。このため、ネットワークの構成は日々変化し、次々と新しいサーバが立ち上がりサービスの提供を始めています。キャンパスオートメーションの方針に沿って考えるとこれは望ましい話ではありますが、このように増え続ける機器を誰が管理し保守していくかを考えると深刻な問題に直面します。

数年前前の状況では、基幹のネットワークや主要なサーバの管理を情報科学センターにお願いしておりました。現在でも各キャンパス間のネットワークやSINETへの接続などは情報科学センターに管理運営をお願いしています。しかし、それ以外のネットワークやサービスについて、それら全てを情報科学センターに押し付けるのはおかしな話であり、また実際問題として困難な状況になってしまいました。主な原因として次のものが考えられます。

1. 定員削減により職員（事務職員、技術職員、助手他）が減少している
2. 管理運営すべき機器が増えて、それぞれの操作に高度の知識が要求される
3. 多種多様なサービスが要求されるようになった
4. 高いセキュリティ対策が要求されるようになった

このように、人は減って機器やサービスは増えて高度化しセキュリティも考慮しなければならないので、このままでは破綻するのは明らかです。また、国立大学法人となり財政的な自立を目指さなければならない現状においては、お金で解決する方法も取れません。しかし、やらなければならない重要な仕事がある以上は、なんとかしなければなりません。

そこで、情報工学部の5学科に協力を要請し、各学科から週に1日ずつ技術職員の方を情報基盤室勤務とする方法を取らせて頂くことになりました。また、可能な限り学科から2名を派遣して頂いて、週毎の交代制を取れるようお願いしております。

定員削減は当然学科の職員にも行われており、週にのべ1日とはいえ情報基盤室に人を出していただくことは大変なことです。その一方で、情報基盤室に派遣する学科にもメリットが無い訳ではありません。学科内で技術職員が担当している仕事には、情報システム以外の様々な機器の管理など多数の仕事があります。このため、各学科のネットワークや計算機システムは、若干名の管理者グループにより管理運営されています。これらの管理者がいくら努力しても最新の様々な技術に追従していくには限界があります。各学科から情報基盤室に派遣されている技術職員の中には、各学科の情報システムの管理をしている方から情報システムとは関連の少ない業務を担当している方まで様々な技術職員が含まれてい

まず、情報システムを管理している方は、情報基盤室の業務を通じて、他の学科の担当者や情報科学センターの協力メンバーと情報交換することができます。各学科で情報システムを管理している場合でも、それぞれの個人個人で得意な分野とあまり得意でない分野がありますし、新しい技術を試した経験などをまだ試していない人が共有できるので、最新の機器やサービスを効率良く各学科に導入することができますようになります。また、通常情報システムとあまり関連がない方は、他のメンバーから教わりながら業務をこなして技術が身に付いていきます。



図 1: 情報基盤室

情報基盤室のメンバーは、申し合わせにより任期は1年程度（学科や各自の事情で少々変わります）と決められています。このように、ローテーションを繰り返す中で、情報基盤室を中心として各学科の技術職員全体の技術レベルが向上していく仕組みが出来上がっています。また、引き継ぎでメンバーが交代することを前提として業務に当たっているため、作業手順をできる限りドキュメントとして残すようにしています。ドキュメントを参考にすれば、交代した人もこれまでの設定を容易に引き継ぎできます。しかしながら、全てをドキュメントに残すことは困難です。そこで、交代したメンバーは半年の間は準メンバーとして協力していただいております。準メンバーは、会議には参加しませんが各ミーリングリストには参加し、各自が必要なときに発言し協力して頂いております。

また、情報基盤室設立当初から、情報基盤室長は情報工学部の情報化推進委員会から学部長に任命されており、情報化推進委員会の実働部隊的な役割を果たしています。しかし、情報基盤室は情報化推進委員会の下部組織ではなく、学部長直下の独立組織です。情報基盤室長は、関連する委員会等との意見調整や作業方針の最終決定を担当し、日常業務は情報基盤室内の作業グループを中心に行われています。

更に、情報システムや管理している機器との関連が深い情報科学センターとe-ラーニング事業推進室[3][4]は協力機関として情報基盤室の会議にメンバーとして出席して頂いており、共同で様々な案件に取り組んでおります。

平成16年7月からは情報工学部事務の情報推進室から、加来郁子技術職員もメンバーとして加わることになり、事務を含めた情報工学部キャンパス全体をサポートする体制が整いました。情報基盤室に

は事務職員は直接配属されておりませんが、情報基盤室の事務関係については、情報工学部総務係が主に担当して下さっており、会計に関わる点では会計係にお世話になっております。また、全学的に情報システム関係の委員会が整理されたのに伴い、事務部総務課情報システム係と頻りに連絡を取り合うことも増えています。

日常的な打ち合わせは、情報基盤室員全員と総務係長が参加する全体のメーリングリストと各作業グループのメーリングリストで行われます。しかし、メールだけでは微妙な問題や全体の決議を必要とする案件もありますので、2週間に1度程全体会議を行っています。全体会議では、室長が議長を務め各グループの現状報告とメールで報告された事項の確認などが行われます。その他に、各作業グループは抱えている作業に応じて自主的に集まって打ち合わせや作業を行います。

2.3 情報基盤室のメンバーと関連する組織と委員会

これまでご紹介しましたように、従来の縦割り型の組織体系を基盤としていながら、情報化推進室を中心として情報基盤整備に関しては横のつながりを重視した体制ができています。具体的なメンバー構成と他組織との関係をご紹介します。

まず、情報基盤室にこれまで関わったメンバーを表1に示します。このように、各学科から技術職員が交代で派遣され、約2年間にこれだけ多くの方が関わっています。

表 1: 情報基盤室のメンバー

役割	氏名	職種	所属	期間
情報基盤室長	井上勝裕	助教授	システム創成情報工学科	H14/8/1-H15/4/30
	大橋健	助教授	生命情報工学科	H15/5/1-
情報基盤室員	本田俊光	技術職員	知能情報工学科	H14/8/1-H16/3/31
	松元隆二	技術職員	知能情報工学科	H14/8/1-H16/9/30
	大野芳久	技術職員	知能情報工学科	H16/4/1-
	須恵耕二	技術職員	知能情報工学科	H16/10/1-
	石川正士	技術職員	電子情報工学科	H14/8/1-H16/3/30
	新山誠二	技術職員	電子情報工学科	H14/8/1-H15/9/30, H16/10/1-
	荒川等	技術職員	電子情報工学科	H15/10/1-H16/9/30
	松島雅寛	技術職員	電子情報工学科	H16/4/1-
	岩崎宣仁	技術職員	システム創成情報工学科	H14/8/1-H16/3/31
	堀之内新吾	技術職員	システム創成情報工学科	H15/10/1-
	月原由紀	技術職員	システム創成情報工学科	H16/10/1-
	福丸浩史	技術職員	機械情報工学科	H14/8/1-H16/3/31
	諸頭秀和	技術職員	機械情報工学科	H16/10/1-
	修行美恵	技術職員	生命情報工学科	H14/8/1-H16/3/31
	楠本朋一郎	技術職員	生命情報工学科	H16/4/1-H16/9/30
	清水康孝	技術職員	生命情報工学科	H15/10/1-
	永松真理	技術職員	生命情報工学科	H16/10/1-
	加来郁子	技術職員	総務係	H16/7/16-
協力メンバー	井上純一	技術職員	情報科学センター	H14/8/1-
	大西淑雅	講師	e-ラーニング事業推進室	H14/8/1-
	山口真之介	助手	情報工学部・e-ラーニング担当	H16/4/1-
	岩村哲也	総務係長	情報工学部事務部	H14/8/1-

所属肩書きは平成16年10月1日現在のもの

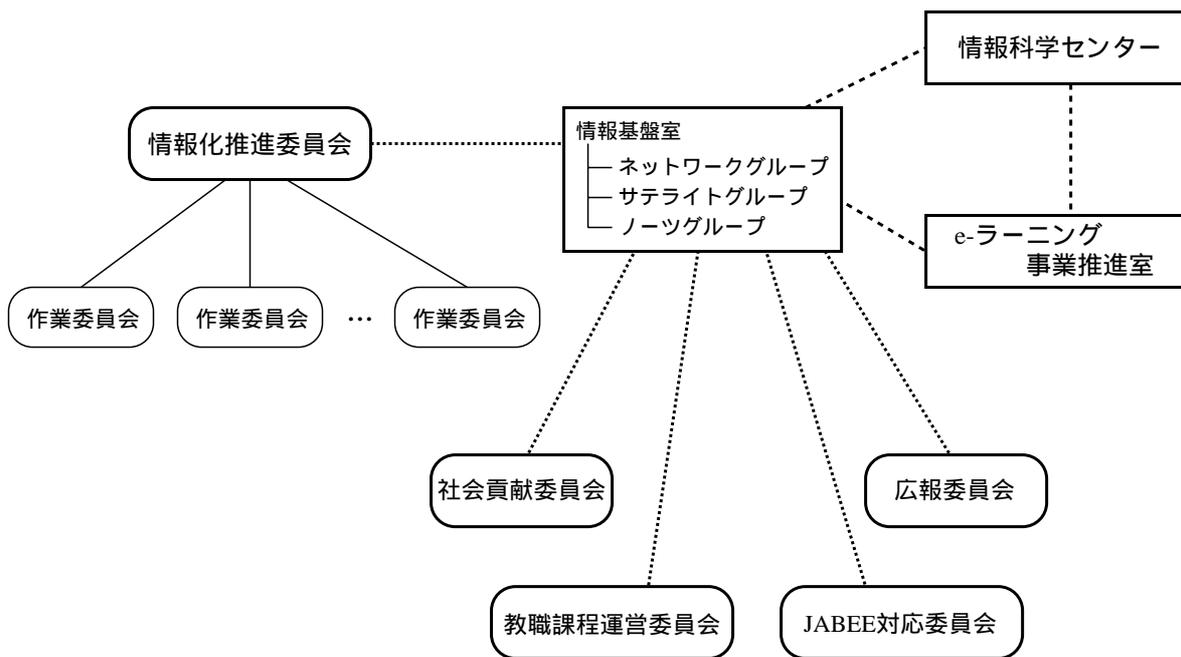


図 2: 情報基盤室と関係機関・委員会

次に、情報基盤室と関連が深い機関や委員会の関係を図 2 に示します。情報科学センターと e-ラーニング事業推進室は情報基盤室と共同で学部共通のサーバ室、ネットワーク室、マルチメディア講義室、リカレント講義室、サテライト端末システムの管理運営を担当しています。サーバ室とネットワーク室には、ロータスノーツのサーバ、www.iizuka.kyutech.ac.jp のサーバ、マルチメディア講義室とリカレント講義室用の Windows Server、サテライト端末サーバ、Kyutech プラザ [2] のメールサーバ、情報基盤室のメールサーバなどのサーバ群と研究棟全体のメインスイッチが設置されています。



図 3: 情報工学部サーバ室

Web サーバは広報委員会と関係が強く、リカレント講義室は教職課程運営委員会、マルチメディア講義室は e-ラーニング事業推進室、Kyutech プラザは社会貢献委員会と教職課程運営委員会と関係があり

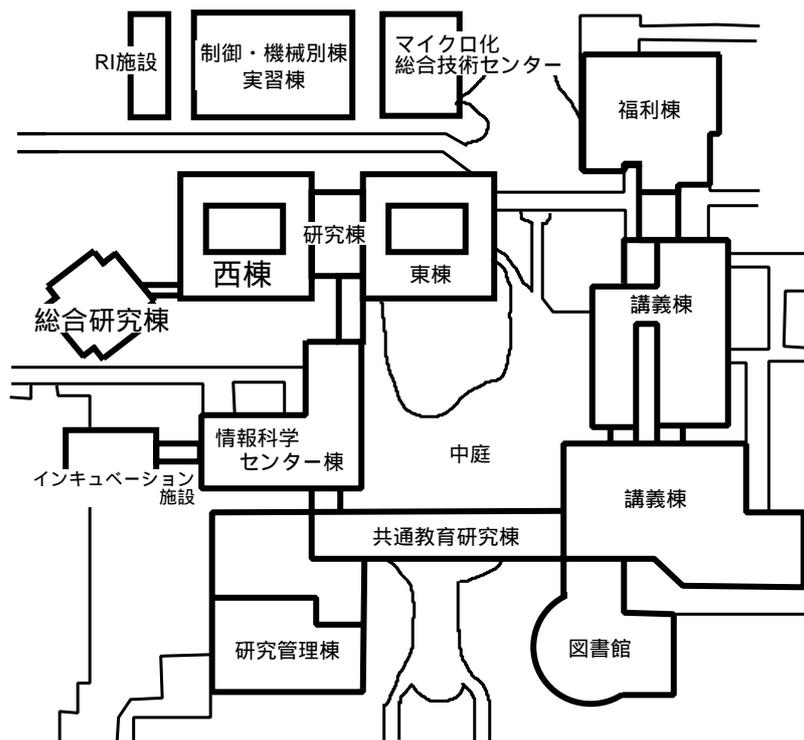


図 4: 飯塚キャンパス平面図

ます。また、ロータスノーツサーバは各委員会や教授会の議事録を掲載し、教員個人情報データベースは大学評価室、高校生見学会は広報委員会と関連があります。このように、それぞれの機器やサービスやデータベースごとに様々な委員会や組織と連携を取りながら管理を行っています。



図 5: 情報基盤室周辺の平面図

平成 16 年 3 月には、情報化推進委員会の下にあった文書電子化作業委員会は解散し、情報基盤室のノートグループがサーバの管理やデータベースの設計などの業務を引きついでいます。情報工学部キャンパスに関しては、教員個人情報データベースの操作支援者も情報基盤室のノートグループが受け持っております。

ノーツグループ以外に、Kyutech プラザと学生が教務情報システムを利用するためのサテライト端末を担当するサテライトグループ、ネットワーク機器やネットワークサービスを担当するネットワークグループがあり、それぞれ3名から4名の室員が担当しています。

これらの業務は、週に1日の日常業務とは別に、それぞれの担当する業務が発生したときに対応してもらいます。このため業務内容によっては、他の業務に優先して時間を割いて対応しなければならない場合もあります。その代り、当番の日も学科等の業務が忙しい場合は、連絡用の PHS を携帯して常に連絡が受けられるようしていれば情報基盤室に詰めている必要はありません。

3 情報基盤室の業務内容

ここでは、情報基盤室が日常的に行っている業務をいくつか紹介します。

3.1 マルチメディア講義室とリカレント講義室

マルチメディア講義室は、e-ラーニングにより他大学の講義を受けるために整備されています。リカレント講義室は、主に教科教育法情報の公開講座⁴のために整備されています。このように主たる目的が異なる部屋ですが、いずれの部屋も Windows が利用できる PC が 40 台程度とプロジェクタ、そして自動追尾カメラとハードディスクレコーダなどが整備されています。



図 6: マルチメディア講義室 (左) とリカレント講義室 (右)

これらは、e-ラーニング事業推進室と教職課程運営委員会と情報基盤室が協力して整備を進めています。ここでの方針は、e-ラーニング事業推進室と教職課程運営委員会がそれぞれの部屋に関して企画や運営を行い、具体的な整備作業や日常管理は情報基盤室が担当しています。

情報科学センターでは、多人数の情報教育を行うために Linux を用いた端末が用意されています。プログラミングなどの情報基礎科目の演習には、このような端末が適していますが、Windows でしか実行できないアプリケーションを利用することはできません。プレゼンテーションソフト、表計算ソフト、ワープロソフトなどマイクロソフトの製品と互換性の高いフリーソフトウェアも開発されていますが、

⁴免許法公開講座とも言います。詳しくは文献 [5] および <http://www.iizuka.kyutech.ac.jp/gakumu/menkyohou/menkyo-top.htm> をご覧ください。

現在のレンタルシステムの端末は快適な速度で実行することはできません⁵。そのため、英語の授業、教職課程の教材作成演習、大学院の講義の演習などでは、これらの2つの講義室の特徴を活用した授業が行われています。マルチメディア講義室については、e-ラーニングの単位互換の講義や他の講義がない時間帯については、一般の学生に公開しています。

情報基盤室では、これら約80台のPCについてOSやアプリケーションのインストールやアップデート、ウィルスチェックなどを日常業務の中で行っています。

これらの部屋のユーザ管理は、Windows Server を用いています。ユーザ管理に手間をかけないように情報科学センターのユーザIDとパスワードをもとにして情報基盤室のWebページから利用者各自がユーザ登録とパスワードの更新を行えるようにしています。

3.2 Kyutech プラザ

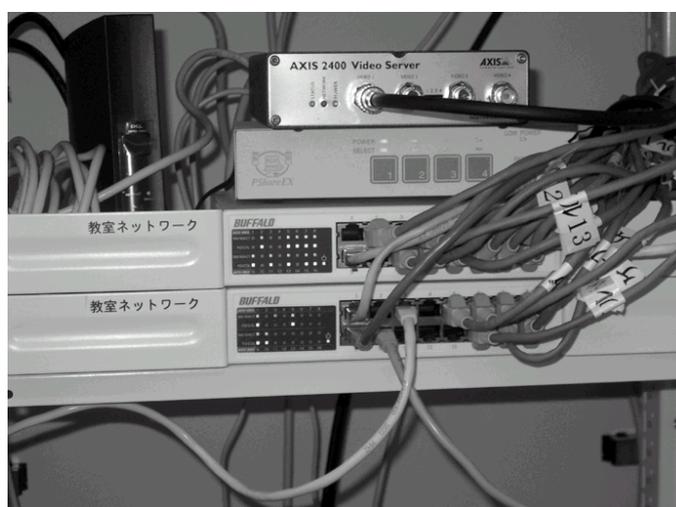


図 7: Kyutech プラザのネットワーク

平成 16 年 3 月、福岡の天神の中心にある IMS ビル 11 階に Kyutech プラザというサテライトキャンパスが開設されました。情報基盤室では、この開設にあたりネットワークと電源の敷設工事、サーバの設置、プリンタスキャナーの設定、ノートパソコンの設定などの作業を担当しました。開設後も、情報技術セミナーや教科教育法情報の認定講座を実施するためのユーザ管理やファイルサーバの設置などの準備を行い、必要に応じてメンテナンスをしています。

運用コストと実験的な試みから、Kyutech プラザと飯塚キャンパスのそれぞれが NTT 西日本の FTTH サービスである B-FLET'S に加入しています。これは、一般向け商用ネットワークサービスの中で飯塚市と福岡市の両方で利用可能な高速サービスが他に無かったためです。同一のインターネットサービスプロバイダーを利用するメリットとして、プロバイダー間のポリシーの違いの影響を受けないことと、インターネットエクスチェンジを経由しない、いわゆる同じネットワークの中なので遅延が少ないことが挙げられます。しかし、自前の回線ではありませんので、安全なネットワークとして利用するために、

⁵平成 17 年 4 月より利用可能になる新システムではこれらの問題は改善されることでしょう。

これらの間に VPN を張り安価に安全で高速な回線を確保しています。

Kyutech プラザには通常の電話回線を引いておりません。その代わりに、IP 電話が設置されており飯塚キャンパス内のゲートキーパーと VPN 経由で接続しています。このため、Kyutech プラザは天神にありながら電話番号には飯塚の市外局番が付いています。電話のシステムとしては、あたかも飯塚キャンパスにある内線の一つとして働きます。もちろん、戸畑や若松の各キャンパスから、88 をつけて飯塚の内線電話と同じ要領で利用できます。Kyutech プラザの入口のドアには、IC カード式の電気錠が取り付けられており、飯塚キャンパスから利用者の登録やログの取得が可能になっています。この鍵のシステム用には、IP 電話とは別の VPN を張って接続しています。

Kyutech プラザには、30 台のノートパソコンとカラーコピーもできる複合カラープリンター、書画カメラ付きプロジェクター、2ch のワイヤレスマイクシステムなどが常備されています。これを用いて、情報技術セミナー、教科教育法情報の認定講座、講演会、研究会、ミーティングなど様々な形で利用することができます。



図 8: Kyutech プラザのパソコン等

30 台のノートパソコンは、UTP のケーブルで利用できる他、無線 LAN(IEEE802.11a/b/g) も利用できます⁶。情報技術セミナーでは主に Linux を利用し、認定講座では主に Windows を利用します。このため、各ノートパソコンは、情報科学センターと類似した環境としての Turbo Linux 10 と Windows XP のデュアルブートにしました。今のところ一般の学生や職員には開放していませんので、各講座用に講師とティーチングアシスタントと受講生の ID を作成して利用して頂く形を取っています。ユーザの管理用には、NIS と Samba を利用して FreeBSD でサーバを構築しました。

Kyutech プラザ内は、インターネットルータが NAT を行うプライベートネットワークとして構成されています。このため、VPN を通るパケット以外は直接インターネットルータを経由してインターネットに出て行きます。Web などを利用する場合は、このままでいいのですが、メールを利用するためにはどこかグローバルなネットワーク上にメールサーバがないと送信はできても受信することができ

⁶当初はアクセスポイントの不具合などにより、安定利用ができませんでしたが、メーカーの対応により改善される見込みです。

ません．Kyutech プラザ用に plaza.kyutech.ac.jp というドメインを取得して情報基盤室が管理しています．そこで，情報基盤室の管理下に mail.plaza.kyutech.ac.jp を設置し，Kyutech プラザ内の NIS のスレーブサーバを立ててユーザ登録すれば直ぐにメールが利用できる仕組みを用意しました．

将来的には，LDAP サーバの利用を検討し，マルチメディア講義室やリカレント講義室と同じように一般公開もできるように準備を進めていきたいと考えています．

3.3 IC カード 設置と管理

飯塚キャンパスでは，従来の磁気カード式の電気錠の老朽化と管理用システムの問題から，順次 IC カード式の電気錠に置き換えが進められています．共通部分や情報科学センター，新しく建てられたインキュベーション施設には IC カード式の電気錠が設置されています．

これらの IC カード式の電気錠の設置は，情報化推進委員会の下の IC カード作業委員会が主に担当しております．各学科や情報創成など担当する部署が存在する場合は，その部署が行う作業を IC カード作業委員会が支援する形を取っています．

マルチメディア講義室とリカレント講義室など，利用者が多く IC カード化が望まれる部屋がいくつかあります．これらは，これまで紹介したようにそれぞれ担当する委員会などがありますが，IC カード式の電気錠設置は単独で行っても非効率な上管理が困難になります．そこで，情報基盤室が各委員会等と協力し，平成 15 年度の情報工学部長裁量経費にお願いし，学科長会にて承認され設置と管理を行うことになりました．Kyutech プラザの IC カード式電気錠もこれらと統合してネットワーク管理グループが管理しています．

3.4 ネットワークスイッチと DNS の管理

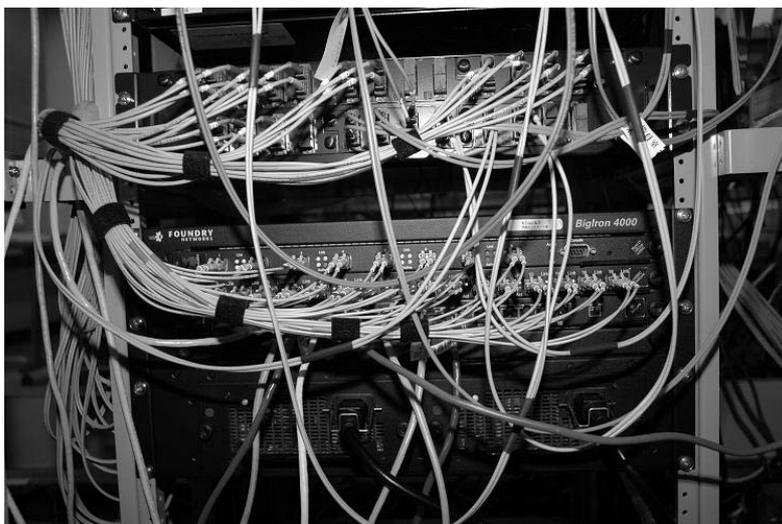


図 9: 研究棟のメインスイッチ

情報工学部の基幹ネットワークのスイッチは，情報科学センターと研究棟にメインスイッチがあり，その先に各学科や事務などのネットワークが繋がる形を取っています．情報科学センターのメインスイッ

手は、情報科学センター内だけでなく事務部や講義棟のネットワークなどを担当しています。研究棟内のメインスイッチには、各学科が接続されています。

従来、この研究棟内のメインスイッチは研究棟のほぼ中心に存在するシステム創成情報工学科のサーバ室に置いて頂いていました。共通部分に置かれていないため、停電やトラブルの際には管理し難い面がありました。

平成14年3月に総合研究棟が建てられた際、部屋割りの変更が行われ、サーバ室とネットワーク室などの共通の部屋を研究棟内に確保することができました。また、研究棟東棟、西棟、総合研究棟の各フロアとネットワーク室の間に光ファイバーを引くことができました。平成15年3月の戸畑と飯塚間のネットワークのリプレースと合わせて、研究棟メインスイッチのネットワーク室への移行が行われました。

これに伴い、研究棟メインスイッチの管理を情報基盤室が中心に行い、情報科学センターが支援するという体制に変更されました。現在では、研究棟メインスイッチの日常的な管理や少々の設定変更は情報基盤室のネットワークグループが担当しています。



図 10: 情報工学部ネットワーク室

ネットワーク関係には、スイッチなどの機材以外に、IP アドレスやドメインなどの管理すべき資源が存在します。情報基盤室では、kiban-i.kyutech.ac.jp という独自ドメイン以外に、Kyutech プラザの plaza.kyutech.ac.jp、飯塚キャンパスの公共的ドメインである iizuka.kyutech.ac.jp のドメインを管理しています。

3.5 ロータスノート

ロータスノートサーバ⁷については、情報化推進委員会の下の文書電子化作業委員会がサーバの管理や情報工学部内で利用されているデータベースの作成や管理を行っていました。情報工学部年報、高校生見学会の研究室紹介、情報工学部 Web サーバ、休講などの情報提供など様々な目的に活用されてきました。



図 11: ノーツサーバ等

しかし、利用できるサービスが増えて来るに従って管理者の作業は増えて新しいサービスを提供することなどは困難になってしまいました。また、ロータスノートサーバについては全学的に管理することになり、大学評価室が作成した教員個人情報データベースなどで利用することが決まっていました。

このような流れの中で、情報工学部内で安定した管理体制を整え、これまで以上にノーツを活用できるようにすべく、文章電子化作業委員会から情報基盤室のノーツグループが引き継ぐことになりました。平成 15 年度は、引継ぎ期間としてノーツサーバのネットワーク室への移動、全学利用に向けた構成変更、新しい体系のユーザ ID の配布を行いました。このように、従来の体制より新しい全学運用体制に移行できたのに伴い、文章電子化作業委員会は、平成 16 年 3 月までで解散いたしました。

サーバの移行が一段落しましたので、ノーツグループはサーバの管理以外にも新しいデータベースの作成や保守も行えるようになってきました。情報工学部の Web サーバがノーツで作成されていますが、この内容更新に関しては広報委員会と協力してノーツグループが担当しています。情報工学部の教授会や各種委員会の議事録も原則ノーツで公開されるようになりました。情報基盤室では、これらの議事録

⁷正確には、サーバがロータスドミノサーバでクライアントがロータスノートなのですが、ユーザが分かりやすいようにノーツサーバとしています。

を公開するデータベースの設計や作成を行い、各々のデータの掲載は総務係など担当の事務職員が行います。教員公募の案内など、情報基盤室で作成し全学での利用が検討されているサービスもいくつかあります。

また、ノートを利用すると Web を用いたアンケートシステムを比較的容易に作成できます。情報工学部では、現在各学科が JABEE の認定を受けられるように準備を進めています。JABEE の認定を受けるためには、教育の水準を保証するために様々な証拠が必要です。この中に、卒業生からの意見を受け付ける仕組みを持つことが要求されています。このため、JABEE 対応委員会からの依頼によりノートを用いて卒業生アンケートを取る仕組みを作成しました。このような依頼に対しては、情報基盤室が技術的な作業を担当し、コンテンツや運用に関わる点（この場合はアンケート内容など）は、依頼元の委員会等に担当して頂くことにしております。

この他にも安全衛生管理にノートの利用を進めているなどのように、ノートの利用は全学的に進めていく合意ができています。特に情報工学部内で利用希望があれば、ノートグループが技術的な相談に乗りますのでいつでもお尋ねください。残念ながら、他の部局までは手が回りませんが、ノートに関してのお尋ねは総務課情報システム係が相談に応じてくれると思います。

3.6 ソフトウェアのメディアの管理

全学でライセンスを取得しているソフトウェアがいくつかあります。これらのソフトウェアでは、個々のライセンス管理やメディアの管理が必要です。主なものに以下のものがあります。

1. マイクロソフトキャンパスライセンス
2. ウィルスチェックソフト
3. ロータスノートサーバ、クライアント

これらのソフトウェアのメディアは、情報基盤室で管理しています。各学科やセンターなどからの貸し出し依頼に応じて、必要なメディアの貸し出しを行います。ソフトウェアによってはインストールマニュアルや運用マニュアルが必要なものもありますので、これらについては必要に応じてドキュメントの作成を行っています。

4 情報基盤室が関わったプロジェクト

情報基盤室では、日常的業務以外にも委員会などの依頼により技術的支援を行っています。この場合、個々の案件に応じて依頼元の委員会のメンバーと情報基盤室のメンバーから構成されるプロジェクトメンバーを組織して対応します。情報基盤室はあくまで技術的な協力する立場なので、予算の獲得や方針の策定は依頼元の委員会に主体的に活動していただくこととなります。いくつか例を示します。

4.1 基礎実験室内ネットワーク

基礎実験室では、各ブース毎に実験内容の説明を行うためにビデオを用いていました。ビデオは取扱が少々不便なので、説明資料をデジタル化してパソコンで視聴するシステムを導入することになりました。しかし、基礎実験室内にネットワークが敷設されていませんでしたので、敷設工事が必要でした。幸いフリーアクセスのフロアーでしたので、人手さえあれば自前で行えます。そこで、情報科学センターと情報基盤室が協力する形で無事ネットワークが敷設できました。

4.2 附属図書館飯塚分館ネットワーク

附属図書館飯塚分館では、事務室までは光ファイバーのネットワークが敷設されていましたが、館内は10Base5を使ったLANしかありませんでした。そこで、平成15年度の教育支援経費に応募し、飯塚分館内に光ファイバーのネットワークを敷設し、無線LANのアクセスポイントの設置とパソコン端末を増設することにしました。このプロジェクトでは、情報化推進委員会と学務委員会が共同で申請し、ネットワークの敷設工事と既存のスイッチの設定変更などの作業を情報基盤室が担当しました。これにより、分館内はエッジスイッチまでが光ファイバー化されたので、VLANを自由に設定し柔軟なネットワーク構成を作成できるようになりました。図書館分館については、日常業務は分館に任せており、トラブルなどの場合にのみ情報基盤室が協力するようになっています。

5 おわりに

これまでご紹介してきましたように、情報基盤室というこれまでの縦割りの組織とは異なる体制の組織は、情報科学センターやe-ラーニング事業推進室を始めとして様々な委員会や部局と連携を取っています。情報工学部の情報関係のシステムの日常的な保守管理を行うだけでなく、可能な範囲で情報化を推進するための開発も行っています。

謝辞

このような組織の必要性をご理解頂き、ご協力頂いている皆様に感謝いたします。今後ともよろしくお願ひいたします。また、内容に関しまして有益なコメントをくださった甲斐郷子講師と図を描き足してくださった辻田尚子様へ感謝致します。

参考文献

- [1] 情報工学部 10 周年記念誌 (CD-ROM): 1996 年 11 月 22 日.
- [2] Kyutech ブラザ: <http://www.kyutech.ac.jp/plaza/>.
- [3] 大西 淑雅他: e-ラーニング事業推進室の立ち上げと活動内容, 九州工業大学情報科学センター広報 第 16 号, 2004 年 1 月.

- [4] e-ラーニング事業推進室: <http://www.e-learning.kyutech.ac.jp/>.
- [5] 篠原 武: 情報工学部リカレント講義室の整備と免許法認定公開講座「情報」の開講について, 九州工業大学情報科学センター広報第 15 号, 2003 年 1 月.

